

107

220



高鼓山

笠井藍水著



始





特107  
220



箏井藍水著

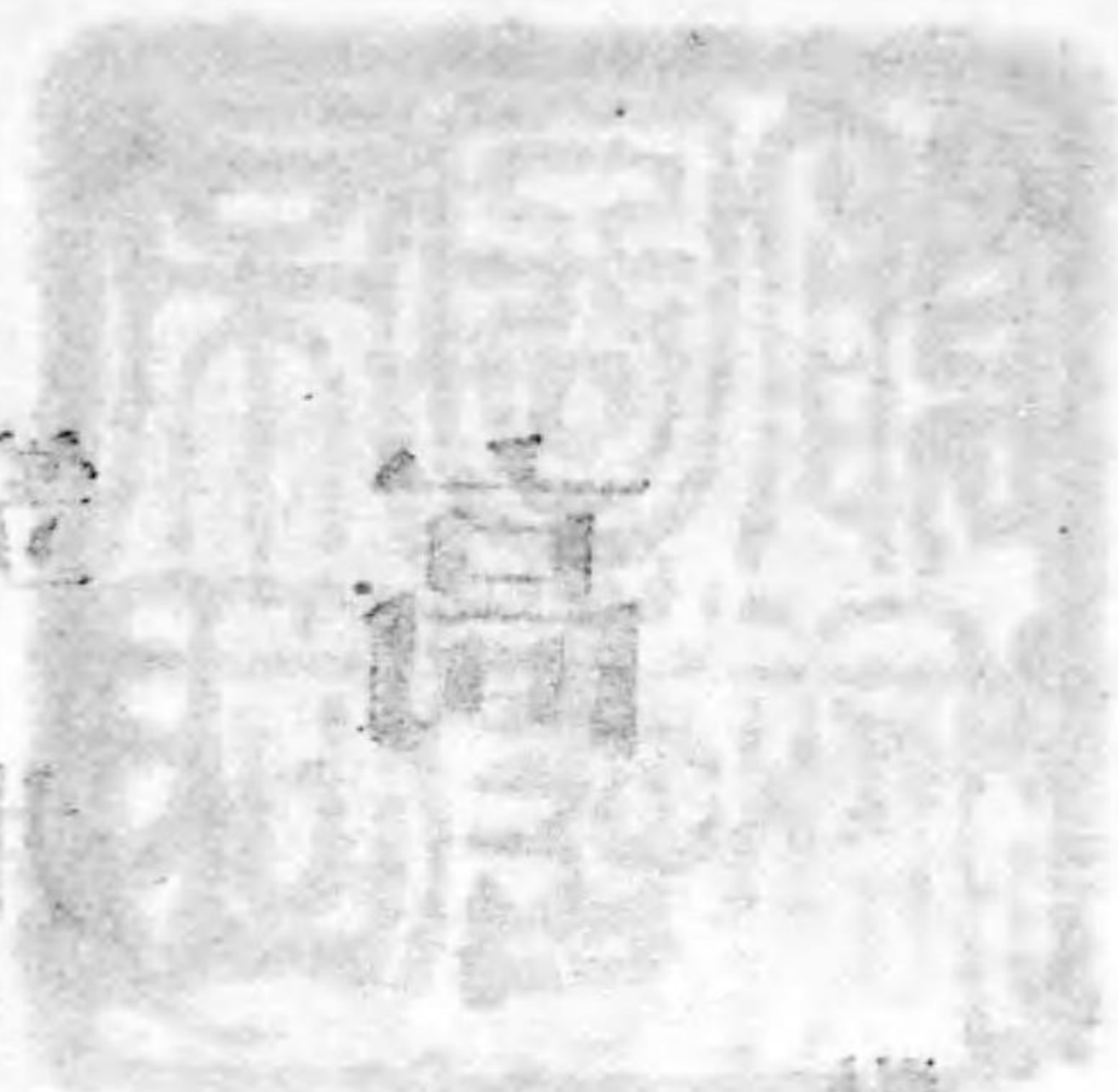
高越山

附錄高越山植物目錄

大正  
4. 9. 11  
内交







笠井藍水著

# 高越山

高越山植物目録

五六  
一九〇四  
文四

## 高越山目次

### 圖版

表紙圖案……………笠井藍水作

第一圖版……………川田川より見たる高越山……………

第二圖版……………高越寺山門、高越寺本堂……………

第三圖版……………セリソリ、經塚……………

### 本文

一、總 說……………地勢、標高、山名……………1頁

二、登山 路……………川田口、穴吹口、種福道、山頂、登路早見……………4頁

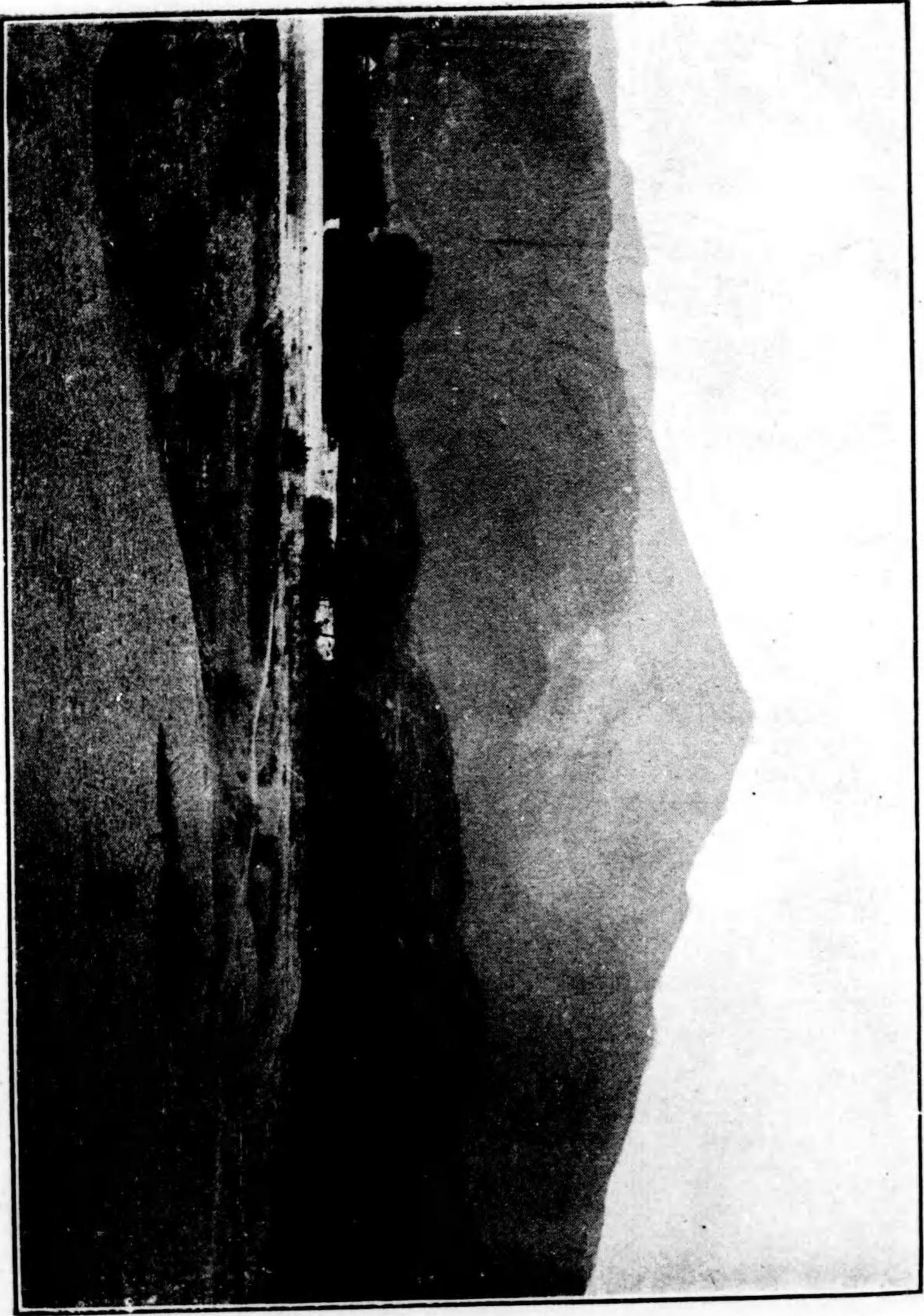
三、高 越 寺……………建築物、緣起、尊信、寶物……………8頁

四、山中の名勝古跡……………中ノ郷、東越き、セリソリ、經塚其他山頂の行場、山頂の眺望、名産氷豆腐、高越山か傳説……………12頁

### 附 録

高越山植物目録……………末尾



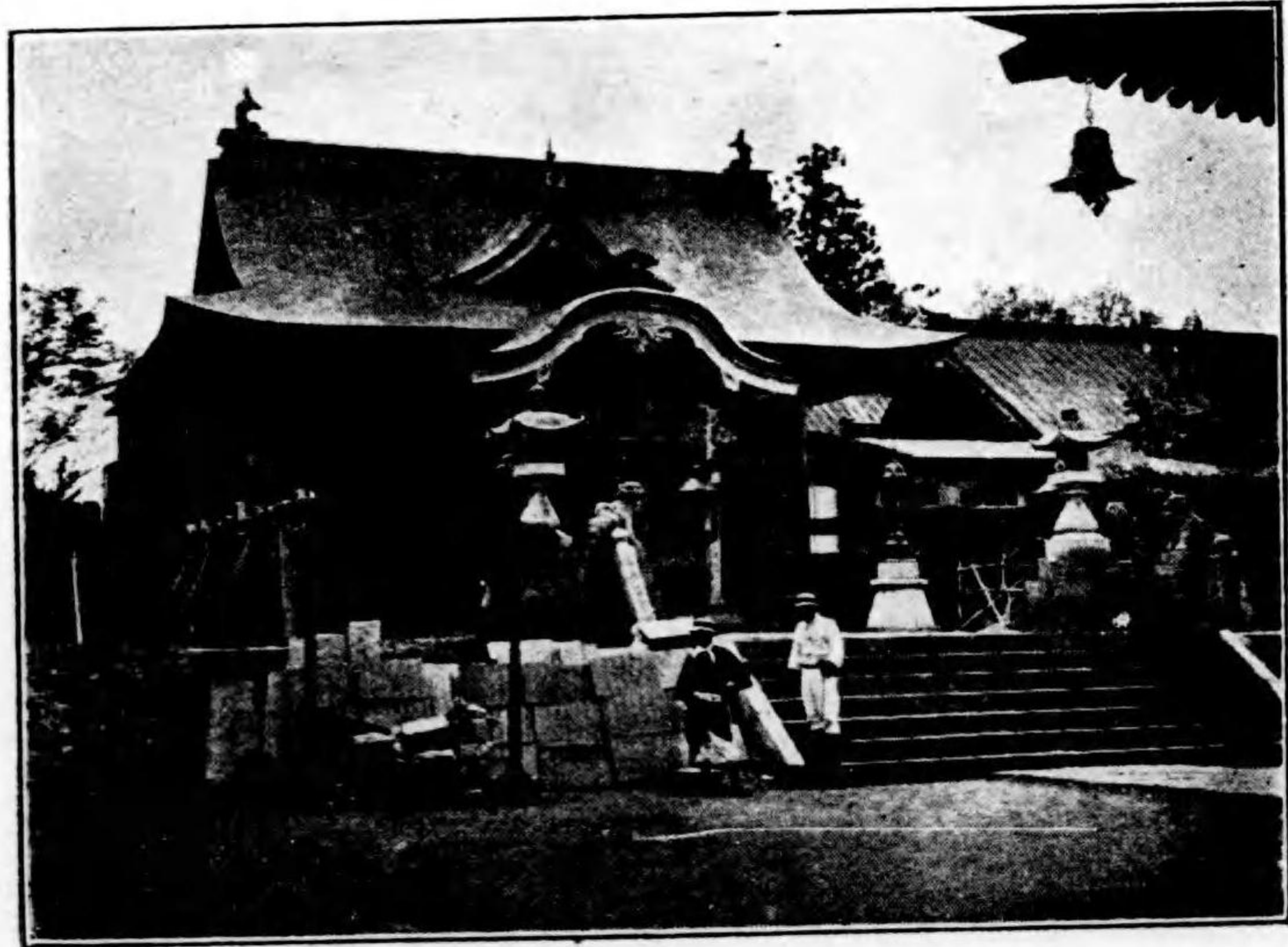


川田川ヨリ見タル高越山





高越寺山門



高越寺本堂





經塚(山頂)

著者



リワリセ



## 序

佛門に入るには經典あり靈山險寺に至るには案内記を要すべし、此處に笠井藍水氏拙僧が宿願の囑を容れられ本書を成就さる正に十方衆生が入山して菩提を得るの業となるべし

藍水氏は當山に登らるゝ事十五回に及び其間草莽荆棘を分けて山中到らざる處なく究めざるものなし而して常に單身炎熱を厭はず風雪を意とせず殊に深夜に登攀せられし事あり氏が修養の凡ならず信仰の淺からざる當に大乘の域に達せられしものと云ふべし氏や未だ弱冠なりと雖も郷土研究家として縣下に嘖々の名あるのみならず既に中央學界に認めらる今氏によりて當山に關する著作を得たるは拙僧の最も敬意を表する處なり其内容の如何に具足せるかの如きに至りては焉ぞ說法するの要あらんや偶々氏の名「高」を冠す當山と因縁の淺からざるを知るべし是亦權現配劑の妙に非ざるか

大正四年七月

高越寺住職

高 埜 良 範



式、四、平、五  
其、九  
山、形、美、論、等、に、就、て、雜、誌、山、岳、(、五、年、二、号、) に、載、せ、た、事、  
が、あ、る、。、ま、た、圖、版、中、著、者、の、小、照、を、挿、入、し、た、の、も、前、述、の、や、う、な、紀、念、的、出、版、の、意、に、出、  
た、も、の、に、過、ぎ、ぬ、。

### 自序

私は暫らくの間書籍とペンを捨てて無知識階級の生活に入つて見る考である。  
此私の發心が彼のしつたるた悉達多の出家の如く將來成道すべき端緒となれば幸である。それ  
に就て私が常に研究の根據地としてゐた高越山を記述して、知友諸兄にも願ち日没  
の光輝をあらしめやうとしたのである。尤も始めは高越山植物目録だけと思つてゐ  
たのであるが、高榎住職の御勤にあづかつてかく案内記様のものを作つたのである。  
著者は別に高越山の地理的研究、山形美論等に就て雑誌山岳(五年二号)に載せた事  
がある。また圖版中著者の小照を挿入したのも、前述のやうな紀念的出版の意に出  
たものゝ過ぎぬ。

一九一五年八月十三日

藍 水 笠 井 高 三 郎







Faint vertical text on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

# 高越山

笠井(藍)水著

## 一總説

高越山は阿波の一名山として縣内著名の山である。吉野川筋でよく誦はれるササと言ふ一種の輪踊の音頭にも

- 阿波で名高い 高越山
- 高越山の 麓にて
- 四十七里の 吉野川
- 吉野川の 川筋を
- 少し下れば 種穂山

と詠まれてゐる。これから推測しても昔から吉野川筋では、最も崇敬されてゐた山であつた事が明白である。高越山が何故に阿波の名山として名を得たのであるかを考へて見るに、山形の崇高な事と、山上に祀られてゐる高越大権現に赫々たる靈威が





あつた事とが其原因となつてゐる。阿波でも劍山や祖谷の附近等少しく奥山へ入れば、高越山以上の高さの山ばかりであるが、吉野川平野に蒞んで居る山の内では此山が一番高い、そして山容が特に立派である。殊に麻植、阿波二郡の吉野川筋から見ると、頭の尖つた三角形をなして、そより立つてゐる。また高越寺のある御蔭で、山の上には原始的森林が保存されてゐるから、濃い藍色を呈して侵すべからざるやうな厳しさがある。高越大権現の由緒のある事や、地方人の信仰の深かつた事などは尙先の頁で説明する。

高越山は徳島の眞西十里ばかりで、麻植郡と美馬郡との境界に跨つてゐる。即ち大体に於て山の東半が麻植郡に、西半が美馬郡に屬して、麻植の分では北部に川田村、南部に三山村があり、美馬の分では北部に穴吹村が南部に口山村がある。併し山頂部は全く川田村に屬してゐる。山の東の麓には川田川があり、西の麓には穴吹川が流れてゐる。それから北の山麓からは種穂山といふ低い山が吉野川平野の中に突出してゐる。南は高越山の西部の尾根からすつと南の方へ續いて、奥野山への連嶺となつてゐる。

高越山の地質は結晶片岩系といふもので、山體を構成してゐる岩石は點紋綠泥角

閃岩である。此岩石は暗綠色の地に粟粒様の白点が無數に含まれて、薄く剥げやすいのである。この外山の北面の下腹部には紅簾片岩と絹雲母片岩との互層したものが連亘してゐる。高越山の森林は上部及び背面(南)を除く外一時濫伐されたから、大部分は灌木、亞喬木の雜木や、雜草地となつてゐるが、山頂部から裏山へかけては原始林で覆はれてゐる。また伐採された後へは明治三十年以降杉檜の植付が出来てゐる。

高越山の標高は陸地測量部五万分一地形圖によつて千百二十二米、六と測定されてゐる。即ち尺度に直すと三千七百五尺となる。其他の地圖や縣統計書などにも色々異つた測量が示されてゐるが、此測定を以て最も正しいものとせなければならぬ。高越山の山名は普通コーツザンと訓ひ、併し土俗の間ではオコーツァンと呼んでゐる。即ち御高越様を訛つたものである。また所謂文人の作品などには越山と書く慣例もあつたから、現今でも詩文などには多くこれを用ひてゐる。阿波志に「一名衣笠山、又稱摩尼珠山」とあり、高越山の繪圖にも、山名五稱として摩尼珠山、蓋山、木綿麻山、西山上、高越山等を擧げてゐる。高越と言ふ名義に就ては諸説がある。早雲家文書高越大権現御鎮座次第には「藏王權現高き山へ越すと云ふ言葉より



高越山と名づけたり」と言ひ、摩尼山高越寺私記には「山高く雲影を越え、空中に聳ゆ、故に高越と謂ふか」と論じ、大日本地名辞書には「高越山は穀山の義にして、穀を加知又は加知曾と訓ひ」と記してゐる。著者の考では、寺が高處に建てられたから高越寺と命名され、それから高越山の山名も出たものと思ふ。

高越山に關した正確な古記録としては吾妻鏡文治六年（建久元年、七百二十五年前）四月十九日の所に「阿波國高越寺」と見え、建久二年の道家處分帳にも載つてゐる、當時藤原氏の傳領してゐた莊園であつたらしい。此等の古記があるのを見ても、高越山の古名寺であつた事は動すべからざる事である。

### 二 登山路

高越山の登路の主要なものは、東北麓の川田からと、西北麓の穴吹からとである。著者はこれを川田口及び穴吹口と稱する。また種穂山を経て登る種穂道がある。若し吉野川沿岸の各地から瀛車を利用して高越山に向ふ者は、東から來る時は湯立驛で、下車して川田口をとり、西からは穴吹驛で下車して穴吹口を取るのが便である。但し種穂道による場合は川田驛で下車せねばならん。川田口穴吹口は共に山麓から

頂まで五十丁の里程とせられ、難易の差は別段ない。路は幅五六尺以上で可成り通りよい。且つ先年から信者の寄附によつて両道に各六箇所、更に此二道が合してゐる所に一箇所及び種穂道に二箇所、計十五箇所の休息所（トマン又は板葺の小屋）が設備されて、登山者に便を與へる事が少くない。かういふ設備は阿波國中は勿論、他府縣へ行つても類例に乏しい。また麓から頂まで丁數を示す標石が立てられてゐる。

川田口 湯立驛から西へ赴く事三四丁で川田川の岸に出る。川を渡り堤防に沿うて十丁あまり南に行くと川田の村落に入る。其處に東西に長い八幡神社の馬場があつて大鳥居が立つてゐる。その傍に立つてゐる高越寺と刻された花崗岩の門から南西へ四五丁行けば、愈高越山の坂路にかゝるのである。其處には「高越山」と額の掛つた一ノ鳥居がある。その少し上を穀谷と言ふて高越寺の里坊がある。即ち右に觀音堂が、左に通夜堂がある。それから山頂を目かけて大体西南に向つて登る。沿道には松の大木や、櫻の古木が三々、五々に群つて枝を廣げてゐる。第三番目の休息所のある所を地藏の丸と稱して眺望に富んでゐる。麓から三十丁程上つ處に一つの庵がある。此處を中ノ郷と稱する。昔は中前寺外二箇寺があつた所で一に中前寺と





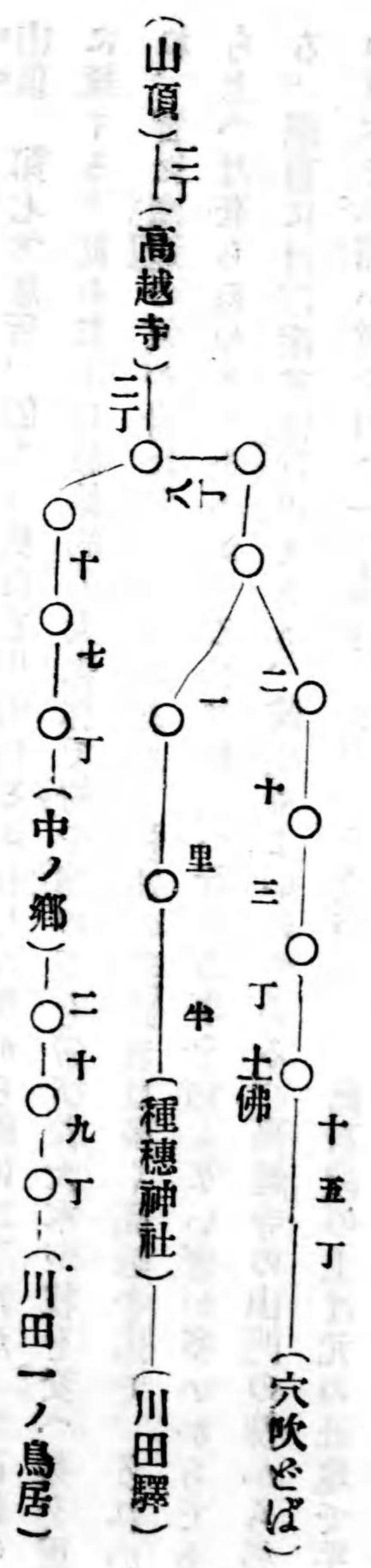


三、高越寺

がよく見える。

◎高越山登路早見

○は休息所



三、高越寺

高越寺は山頂からや東へ下つた山角にあつて、南東向きとなつてゐる。先づ花崗岩の立派な石段を登ると、新しい山門(仁王門)が宏壯に建てられてゐる。門の左側には鐘樓がある。少し向へ進むと正面に本堂がある。右手に茶堂と十六羅漢堂がある。更に奥へ進むと客殿、書院、僧坊、庫裡等が数棟並んでゐる。何れも山上とし

ては稀に見る建築であるが就中本堂、山門、及び鐘樓は唐金葺で、軒には精巧な彫刻物を取りつけられてゐるから甚だ美觀を呈してゐる。

當山に傳つてゐる縁起によると、今を去る千二百餘年の昔、山伏の元祖である役行者(小角)の開基し給ふ所で、大和國吉野藏王權現とは一体分身である。故に吉野に對して當山を西山上と稱するのである。次で延暦年間には有名な弘法大師が御登山遊されて堂塔をも建立し、佛像なども彫刻せられた。また理源阿闍梨(聖賢といふ、貞觀年間洛東醍醐寺を開祖す)も御入山あつて、山頂の西南にある岩窟で一夏の間護摩修行をなされ給ひ、一字一石の法華經を山頂に埋められた。經塚は即ちそれである。

高越權現は前記の通り古來高僧の草創された靈峯であるから、世上の尊信特に厚く、嵯峨天皇の勅願があつて種野山の二莊を以て供料に宛てられる旨の詔書と賜はり源頼朝も深く歸向されて建久年中に水田を寺領に寄附した。次で阿波民部親能は伽藍を修繕し、小笠原義盛は社殿を修補し、足利尊氏は寺領を寄進し、細川左馬頭は社殿を造営した等歴代の名將、領主等から厚き待遇をうけた。降つて徳川時代には藩主蜂須賀侯累代の御尊信があつて伽藍の建築、寺領の寄進等をせられた事一



## 三、高越寺

再またに止とどまらなかつた。尙なほ以上の事實じじつに就つては多くの舊記きゆきがあつたのであるが、元祿三年くわいろく回祿くわいろくの災わざに罹かつて悉しつく烏有ういうに歸かへしてしまつた。たゞ蜂須賀蓬庵公はちすけより高越寺たかごへに宛あつてた書簡しよかんは今いまも猶數なほ通存つうぞんしてゐる。

高越權現たかごへに奉祀ほうししてゐた早雲家はやくも（忌部氏いんべし）の高越大權現たかごへ鎮座次第ちんざだいといふ文書ぶんしよには、吉野藏王權現よしのざうわうの神託かみたくがあつて、宣化天皇せんけ午うまの歲としに早雲松太夫はやくも高房たかふらうが當衣笠山あぎのかさに迎むかへ奉ほうつたと言いふのであるが、あまり宛あつにならぬ記録きらくである。

高越權現たかごへは維新いしんの際さいまでは神佛かみぶつ兩道りうだうであつたので、多くの神社佛閣しんじあはらは總すべて舊社地きゆしやぢに建たてられていた。即すなはち本社ほんしには天日あめのひ鷲命しゆのみこと、藏王權現ざうわうを祀まつり、本堂ほんだうには本尊ほんそん千手觀音せんじやくわんを安置あんじしてあつた。一ひとに高越權現たかごへは伊弉諾いざな、伊弉册いざなの二尊ふたそんを祭まつつてあつて、延喜式えんぎしき伊射奈美神社いさなみに當あたるとの説いもある。其他た脇宮わきみや、御影堂おんかげだう、行者堂ぎやくじやうだう等らがあつた、又また現今いまの寺地てらぢには僅すこに僧坊そうぼうと護摩堂ごまだうとがあつた。維新いしんに際さいして神佛取分けかみぶつとりわけの令さしがあつたから、社やしろを取り除はずけて寺てらのみとし、漸次せんじ諸堂しよだうを増築ぞうしきして今いまや舊時きゆじに勝かるの大伽藍だいからんとなつたのである。そして權現かみの靈威れいゐ恩驗おんげんは愈々いよいよあらたかに、參詣さんぎ人は獨ひとりり吉野川筋よしのがわに限かぎらず遠とほく勝浦かたうら、那賀なげの二郡ふたぐん或あるは讚岐さんぎ等らから群ぐんり來きる有様ありさまである。

高越寺たかごへ所藏しよざうの寶物ほうぶつは頗なほる多數たふであるが、其内そのうち主要しゆゑなるものは左ひだりの通りである。

摩尼珠山高越寺私記まにじゆざんたかごへし 寛文五年くわんぶん寺僧てらそう宥尊いゝそんの記きした緣起えんぎで、最もも信賴しんらいするに足たりるべきものである。

涅槃像ねはんざう（國寶こくぼ） 絹本着色きんぼんしきの佛畫ぶつゑで、幅ひろ四尺しゆ豎たて五尺ごある。絹本の質しつは蓮れんの織維おりので織をつたものである。本圖ほんずは始め豊公ゆへい朝鮮征伐しやうしんせいばつの砌戰利品せきせんりひんとして我國わがくにに傳來てんらいし、當山たうざんに納いれまつてゐたが、兵乱へいらんに際さいして奪さらはれて土佐國とさくにに行いつてゐたのを、一宇村いつむらの土豪いづたう南源六なんげんが之これを取り返かへし、慶長三年けいぢやう三月さんげつ再び當山たうざんに奉納ほうなつせられた。明治四十三年めいし八月はつげつ製作せいさくの優秀ゆうしゆなるものとして國寶こくぼに編入へんにせられた。

不動明王畫像ふどうめいおうゑ 弘法大師筆こうぼうだいしと傳つたふ。

愛染明王畫像あいせんめいおうゑ 智證大師筆ちじやうだいしと傳つたふ。

普賢菩薩畫像ふけんぼさつゑ 兆殿司筆てうてんしと傳つたふ。

摩利支天畫像まろしあまゑ 弘法大師筆こうぼうだいしと傳つたふ。蜂須賀家政公はちすけかみの寄附よつにかゝる。

弘法大師畫像こうぼうだいしゑ 眞如親王御筆しんじゆしんわうごと傳つたふ。

心經しんぎやう（一卷いつくわん） 弘法大師こうぼうだいしの御眞筆ごしんと傳つたふ。

大般若經だいぱんげきやう（六百卷ろくひやくくわん） 但し寫經しやきやう十七卷じゆしちくわん目紺紙めくわんし金泥きんじゆにて願主ねんしゆは大江朝臣たうかうしん成基せいき女紀氏にきぢし記きにして、天台僧圓範たいたいそうえんぱん及び宣祐せんすう兩人ふたりが保安年中へいあんちゆう迄いたに書かいたもので今いまより八百三十餘はちひゃくさんじゆ



四、山中の名勝古跡

年前のものである。

鰐口

梵磬にして直径三寸五分ばかり、表面は鬼面をなし、裏面に「阿州高越山

寺、延暦廿年二月十一日」と銘してある。延暦廿年は千百五十九年前に當る。

獨鈷杵

聖寶の所持せしものと云ふ、長さ六寸ばかり。

高越寺會目

舊	三月十五日	花の會式
舊	七月十八日	大護摩會當日古來女人を禁ず
舊	九月廿四日	五穀豐納會

四 山中の名勝古跡

中ノ郷 川田口山麓から三十丁登つた中ノ郷は、一名中前寺とも稱して昔中前寺外二ヶ寺がここにあつたのである。庵の前には二畝ばかりの圓い池がある。これを萬代の池と稱して、土俗の所謂三番双(傀儡)の歌に「萬代の池の龜は甲に三玉頂いたり」と詠まれたものであると言傳へられてゐる。此池一時小さくなつてゐたのを、好事

の者が今の如く掘り廣げたのである。池の西岸から少し上つた所に檜の大木があつて、其下に梵字石其他の墓がある。其内二つは中前寺の住持であつた高僧の墓で、一は石面に「中興開山市常僧正」と、今一つは「大僧都慶舜」と刻されてゐる。其他五枚の梵字石は皆板碑と稱せられるもので、考古學者の有益な材料となるものである。中には應永、永享等の年号の入つたものもある。此板碑分布地は著者の發見にかゝるもので、機を得て學界に報告する心算である。中ノ郷から一寸上つた所は數十間の間垣路となつてゐる。こゝを櫻の馬場と呼んで昔は澤山の櫻があつたが今は殆ど枯れつきてゐる。

東・東・東 行場中ノ郷萬の代池の東側から細路を東へ二丁ばかり行つた所にある。山腹に突出た斷崖の上でろの岩の端から下を覗くと、岩の基脚は見えず、數十間の高さにあるので身の毛が立つ程である。傍には没ノ行者の石像がある。東・東・東 中ノ郷から上の道からも見えてゐる。

セ・セ・セ (追割) これも行場で高越寺の東下から三四十間下りた所にある。また第七休息所の附近から南へ入つてゐる道を一丁餘行けば達する。此追割は巨岩の裂けた間で恰も民家の壁間の様なものである。其幅は五尺長さは十間餘高さは七、八間

四、山中の名勝古跡







□ 高 越 山 の 傳 説 □

高越山に關した傳説も色々あるが、最も有名で面白いのは、高越山と美馬郡の大瀧山とが争をして石の投合なげあひをしたといふ事である。そして高越山が投げた石は大瀧山へ届いて、今でも寺から少し下つた處に其石がある。また大瀧山から投げた石は高越山迄届かず、拜原へ落ちた。其石は縣道から少し北へは入つた畑中にあつて大瀧山の手の跡が入つてゐる。また一説には此等の投合した石が大瀧山の寺の床下にあると言ひ、高越山の頂にもあるとも言ふが、何れも其實物は無いのである。阿波郡香美村には高越大権現の足跡石があり、尙高越山から投げた石が阿波郡にもあると言ふ事である。山と山とが争をしたといふ古傳説は他地方にも多少の類例があるが、石の投げ合をしたと言ふ事は珍しい形式で、傳説研究者にとつて貴重な材料となる。

廣

告

内 容 概 略

美馬郡教育會編纂  
編纂委員笠井藍水

美馬郡郷土誌

菊版凡三百頁  
寫真版十五葉木版石版多數

實價 壹圓參拾錢

送料 八 錢

緒 論

第一篇 自然地理

地形地質、氣象、岩石及礦物、植物、動物

第二篇 歴 史

石器時代、古墳時代、國司守護時代、安土桃山時代、徳川時代、明治時代

第三篇 人 文

交通、政治、教育、宗教、産業、土俗

第四篇 町村誌

協町外十五箇町村(土地、人文、沿革、社寺、名勝、傳記)

美馬郡地名一覽表、索引

殘本僅少あり希望者は下名へ申込まるべし

徳島縣脇町 笠井高三郎



# 告 廣 略 概 容 内

## □ 說 傳 の 山 越 高 □

高越山に關した傳説も色々あるが、最も有名で面白いのは、高越山と美馬郡の大瀧山とが争をして石の投合なげあひをしたといふ事である。そして高越山が投げた石は大瀧山へ届いて、今でも寺から少し下つた處に其石がある。また大瀧山から投げた石は高越山迄届かず、拜原へ落ちた。其石は縣道から少し北へは入つた畑中にあつて大瀧山の手の跡が入つてゐる。また一説には此等の投合した石が大瀧山の寺の床下にあると言ひ、高越山の頂にもあるとも言ふが、何れも其實物は無いのである。阿波郡香美村には高越大権現の足跡石があり、尙高越山から投げた石が阿波郡にもある。言ふ事である。山と山とが争をしたといふ古傳説は他地方にも多少の類例があるが、石の投げ合をしたと言ふ事は珍しい形式で、傳説研究者にとつて貴重な材料となる。

美馬郡教育會編纂  
編纂委員笠井藍水

菊 版 凡 三 百 頁  
寫真版十五葉木版石版多數

# 美馬郡郷土誌

實 價 壹 圓 參 拾 錢  
送 料 八 錢

緒 論

- 第一篇 自然地理 地形地質、氣象、岩石及鑛物、植物、動物
- 第二篇 歴 史 石器時代、古墳時代、國司守護時代、安土桃山時代、徳川時代、明治時代
- 第三篇 人 文 交通、政治、教育、宗教、産業、土俗
- 第四篇 町村誌 協町外十五箇町村(土地、人文、沿革、社寺、名勝、傳記)

美馬郡地名一覽表、索引

殘本僅少あり希望者は下名へ申込まるべし

徳島縣協町 笠井高三郎



美馬郡郷土誌に對する批評の一二

▲徳島日日新報

美馬郡教育會の囑により郷土誌編纂を果したるは本社のお客様たる笠井高三郎氏也、氏が斯の種研究に就て養ふ所多きは已に世人の知る如く、殊に其の郷里を中心として一郡の土俗を記せるは郷土誌中の華と謂ふべし。(中略)思ふに本書は美馬郡に局限せられし如く見ゆるも決して一局部の郷土誌にあらず、汎く阿波に關聯したるもの也。(中略)決して村學究の述べ難きものあり。若し斯の如き郷土誌の全國に起らんには學界の珍たる事發する迄もあらざる也、加ふるに編者の多方面に材料を蒐集したるは多智多才驚嘆すべし(以下略)

(痴羊)

▲徳島毎日新聞

美馬郡教育會に於ては明治四十一年六月十一日開催せし總集會に於て、東宮行啓記念として同郡郷土誌を編纂發行することを決議し爾來各町村に一二名の材料取調委員を置き取調要項を各委員に配布し大正元年に至り郡費の補助を得て事業益進み藍水笠井高三郎氏を編纂委員に擧げしが氏は熱誠事に當り取調委員より報告、其他幾多の参考資料を涉獵し遂に本年三月を以て全部脱稿、直に印刷に付し十日を以て愈發行するに至れり内容は自然地理、歴史、人文、地理、町村誌の各篇に分ち篇中に幾多の章を立て節を分ち頗る整然として郷土誌編纂の範とするに足る、殊に自然地理、歴史の如きは編纂委員が特殊の興味と智識とを有する人なるだけに記述精妙、繁簡宜しきを得、考證も亦確實に、大に見るべきもの有り之によりて先づ美馬郡の大体を知り更に町村誌に及ばは同郡の地理歴史、人文發達の模様殆ど掌中を指すか如きものあらむ幾多の寫真版、寫生圖を以て説明を補ひ附録として地名一覽表、圖版挿繪の説明、參考文書目録、索引あり用意親切なりと云べし教育會の記念事業としては誠に恰當の舉にして之により大いに利益を得るは獨り美馬郡のみならず全篇三百頁蓋し本縣における一大著述たるべし



高越山植物目錄



高越山植物目録

緒 言

著者は一九〇一年始めて高越山に登り一九〇八年以下は研究的の目的で屢登山し現今迄に登山の回数十五回に及んだ。

本目録に記したものは高越山中凡そ二五〇米以上のものである。これは田畝植物の混入を防いで純山地の植物状態を表はさうとしたのである。

本目録に登録した植物の種類は四百十五種で高越山産の普通のものは大抵漏してないのであるが尙ほ漏れたものが五十種以上はある。配列の順序は各科を自然分科の順とし、各種名は學名のアルファベット順としてある。また隠花植物は高等なものゝみに止めてあるし探究も不充分である。

本目録の中三分の一以上は牧野富太郎氏の檢定をうけた。其他友人山口儀平氏の報告をも参考とした。從來高越山植物の採集家としては笠井文夫氏、二階重樓氏等がある。両氏の採集品を参考に資する事が出来なかつたのは最も遺憾である。

吉野川沿岸の山としては高越山が最も植物の種類に富んでゐる好採集場である。山中では山頂の森林中と岩屋谷水源とに珍しいものが多い。

一九一五年七月

著者 笠井高三郎







公孫樹門

公孫樹科  
いてふ

松柏門

一位科

いぬがや

いちゐ

かや

松杉科

もみ

ひのき

すぎ

あかまつ

くろまつ

つが

被子類

單子葉門

禾本科

ぬかば

をがるかや

しろこぶなぐさ

とだしば

さいとがや  
ひめのがりやす  
めひじは  
みのでめ  
かうやぎ  
やまかもじぐさ  
とぼしがら  
ちがや  
ちごぎ  
こめがや  
すき  
いとすき  
ちごみぎ  
すだめのひえ  
くさよし  
みぞいちごつなぎ  
すだめのかたびら  
ひえがへり  
きんえのころ  
あぶらすき  
くまぎ

莎草科

あをすげ類似品

牧野氏研究中

ゐ  
はひかうがひせきしやう  
すだめのひえ  
ぬかばしさう

百部科

なべわり

百合科

そくしんらん  
はうちやくさう  
かたくり  
てんがいゆり  
しやうじやうばかま  
うばゆり  
こおにゆり  
やぶらん  
ひめやぶらん  
ほそぼのあまな  
まひづるさう  
つくばねさう  
なるこゆり  
あませころ  
さるとりいばら  
しほで

やはらすげ  
やまなるこ  
をにすげ  
ますくさ  
ひなすげ  
じゆすすげ  
ひごくさ  
ひめしらすげ  
たかねさう  
くご  
あぶらがや  
たまがやつり  
てんつき  
やまゐ

天南星科

みつばてんなんしやう  
うらしまさう  
おほはんげ

鴨跖草科

つゆくさ  
やぶめうが

燈心草科



ほととぎす  
しろばなえんれいさう

薯蕷科

やまのいも  
さくばところ  
かにところ

鳶尾科

ひあふぎ

蘭科

えびね  
ほくろ  
くまがいさう  
ぎんらん  
さんらん  
みやまうづら  
くもきりさう  
ひめけいらん  
ねぢばな

雙子葉門  
離瓣花區

三白草科

とくだみ

金粟蘭科

ふたりしづか

胡桃科

のぐるみ  
さはぐるみ 高越寺石段

楊柳科

やまならし  
ねこやなぎ  
おほさるこやなぎ?  
やまやなぎ

樺木科

やまはんのき  
いぬしで  
やしやぶし

殼斗科

いぬぶな  
ぶなのき  
ならがしは

蓼科

いぬたで  
いたどり  
みやまたにそば  
みつひき  
ぎしぎし

藜科

あかぎ

商陸科

まるみやまびばう  
岩屋谷東水源

石竹科

みよなぐさ  
かはらなでしこ  
つめくさ  
つるはこべ  
やまはこべ  
のみのふすま

木蘭科

しきみ  
びなんかづら  
ほほのき

あらかし

おほなら

こなら

くぬぎ

楡科

けやき

桑科

やまぐは

くは

蕁麻科

やぶまを

あかそ

ひめうはごみさう

うはばみさう

むかごいらくさ

槲寄生科

やどりき

檀香科

かなびきさう



こぶし

雲葉科

かつら

ふさごくら

毛茛科

やまどりかぶと

るゐえふしようま

いちりんさう

さらしなしようま

みつばしようま

ばたんづる

せんになさう

やましやくやく

うまのあしがた

きつねのぼたん

しぎんからまつ

みやまからまつ

木通科

みつばあけび

あけび

小薬科

めぎ

ばいくわいかりさう

樟科

くすのき

やぶにくけい

だんかうばい

あぶらちやん

かなくぎのき

しろもじ

くろもじ

罌粟科

やぶえんでさく

みやまきけまん

たけにぐさ 舊社地

十字科

いぬがらし

菜膏科

まうせんごけ 土佛の西

景天科

まるばまんねんぐさ

うめ

のいばら

ふゆいちご

くまいちご

きいちご

まるばふゆいちご

くさいちご

なはしろいちご

いぶきしもつけ

こごめうつぎ

萱科

ねむのき

げんげ

みそなをし

ぬすびとばぎ

こまつなぎ

まきえはぎ

ふち

さようふち

くす

くら

捲牛兒科

ふうろさう

虎耳草科

とりあしろうま

くさあぢさい

みやまねこのめさう

ひめうつぎ

こうつぎ

うつぎ

さはあぢさゐ

のりうつぎ

ことうづる

がくうつぎ

ちやるめるさう

うめぼらさう

だいもんじさう

いはがらみ

薔薇科

きんみづひき

へびいちご

だいてんさう

うらじろのき

うしころし

つるきんばい 絶頂

やまざくら

みやまざくら 高越寺下路傍



酢醬草科  
みやまかたばみ

芸香科  
まつかせさう  
いぬざんせう  
みやましきみ  
さんせう

遠志科  
ひめはぎ

大戟科  
しらき  
あかめがしは  
こばんのき

漆樹科  
ぬるで  
はせのき  
つたうるし  
やまうるし

冬青科  
いぬつげ

そよこ

衛矛科  
つるうめもどき  
にしきど  
まゆみ  
つりばな

槭樹科  
やましはかへで  
かへで  
やまもみぢ  
いたやかへで  
えんこうかへで  
かぢかへで  
うりはだかへで  
こはうちはかへで

七葉樹科  
どちのき

鳳仙花科  
きつりふね

鼠李科

瑞香科  
こがんび  
きがんび

胡頹子科  
なはしろぐみ  
あきぐみ

柳葉菜科  
たにたで  
みつたまさう

蟻塔科  
ありのたふ

五加科  
たらのき  
きづた  
はりぎり  
こしあぶら  
うど

繖形科  
みしまさいこ  
せんとうさう

くろかんば

葡萄科  
のぶたう  
つた

山茶科  
ひさかき

旌節花科  
きふじ

金絲桃科  
ともえさう  
おどざりさう  
あせおどざり  
こけおどざり

董々菜科  
あふひすみれ  
ながばのたちつばすみれ  
つばすみれ  
しはいすみれ  
しこくすみれ



みつばせり  
はなびせり

山茱萸科

くまのみづき  
みづき  
うりのき

合瓣花區

命法科  
りやうぶ

鹿蹄草科

ぎんりやうさう  
いちやくさう

石南科

しろとうだん

あせび

ねちき

しやくなげ

岩屋谷水源中程の尾根に多し

やまつとじ

もちつとじ

こばのみつばつとじ

しろばなうんせんつとじ

ほんつとじ

なつはせ

うすのき

紫金牛科

やぶかうじ

櫻草科

をかどらのを

こなすび

かつこさう 上部

灰木科

さはふたぎ

齋墩果科

えこのき

木犀科

こばのとねりこ

いはたのき

ねすみもち

ひくらぎ

龍膽科

うつぼくさ

くるまばな

みやまたふばな

かきどほし

ひきをこし

あきちやうじ

いぬやまはくか

あきのたむらさう

ことぢさう

たつなみさう

茄科

はしりこころ

玄參科

ほろぎく 裏山寺の西

さぎこけ

みやままこな

みどほつづき

こしほがま

ひなのうすつぼ

苦苣苔科

いはたばこ

いはぎりさう

セリワリ岩

つるりんだう

りんだう

あさまりんだう 上部

ふでりんだう

あけぼのさう

せんぶり

夾竹桃科

ていかつづら

蘿摩科

ふなばらさう

紫草科

おほるりさう

はたるかづら

やまるりさう

みづたびらこ

たびらこ

馬鞭草科

やぶむらさき

くさぎ

唇形科



車前科

おほぼこ

茜草科

くるまばさう

あり色ほし

やへむぐら

きくむぐら

きぬたさう

くるまむぐら

やまむぐら

へくそかづら

いなもりさう

おほきぬたさう

あかね

忍冬科

やぶらつき

たにらつき

こつくばね

つくばねらつき

うすばへらたんぼく  
(二階氏採)

うぐひすかぐら

すひかづら

にはとこ

がますみ

みやまがますみ

敗醬科

をみなへし

をとこへし

つるかのこさう

桔梗科

はたるぶくろ

むらさきはたるぶくろ

たにぎとやう

きとやう

菊科

きつかふはぐま

ていしやうさう

やまはとこ

よもぎ

やまじのぎく

しらやまぎく

こんぎく

やましるぎく

よめな

もみぢがさ

以上415種

やぶれがさ

やぶたぼこ

がんくびさう

しまかんぎく 岩屋谷

りうなうぎく

のあざみ

むかしよもぎ

ひよどりばな

ひめむかしよもぎ

あれぢのぎく

せんぼんやり

ちとこぐさ

はとこぐさ

たかさごさう

にがな

やくしさう

いはにがな

をたからかう

かうやぼうき

ふき

かうぞりな

きつねあざみ

さはをぐるま

さはぎく

たんぼぼ







大正四年九月五日印刷  
大正四年九月十日發行

定價金拾貳錢  
(郵送料貳錢)

德島縣脇町六十二番屋敷

發行者兼 笠井高三郎

德島市紙屋町十八番地

印刷者 米津德藏

德島市富田濱側六十四番屋敷

印刷所 株式會社 德島日日新報社

德島縣麻植郡川田局區內

發賣元 高越寺

振替口座大阪二八三八四番



登寶氣高誠寺

其門口到大門二八三八四番

此處為...

中興院 經書品日海琳

此處...

中興院 米...

此處...

中興院 堂 共 高三

此處...

家期全...

大正四年...



終

高越山植物目錄

LIST OF PLANTS

ON MT. KŌTSU

BY T. KASAI

